R・H・ブラウンのレトリック論

――その「詩学 Poetics」と「政治 Politics」――

氏川　雅典

本稿ではR・H・ブラウンのレトリック論が、社会学に対してもつ可能性について検討する。ブラウンの目的は公共空間における共同体の形成である。その目的を達成するために、彼は「認識としてのレトリック」という観点から、社会科学のレトリック分析をおこなう。

以上の議論を通じて、ブラウンのレトリック分析は、議論領域を構成している各アクターの関係を、レトリックを通じて明らかにする「議論の社会学」へと展開しうることが示される。

1　はじめに

本稿の目的は、Richard Harvey Brown(以下、ブラウン) の議論の検討を通じて、社会学におけるレトリック分析の可能性を明らかにすることである。ここでのレトリックとは、「単なる空虚な言葉」ではなく、議論において説得のために用いられる類型化された語法を意味する[1]。

1－1　「探究のレトリック」

1980 年代以降、一部の人間・社会科学の研究者たちの間で、「レトリック」への関心が高まった。C・ギアツによれば、それは人間・社会科学の研究者の自己像の変化の表れである。

この変化の背景には「解釈学的転回」(ギアツ) がある。すなわち、①人間・社会科学の対象は、解釈をおこなう人間であること、②それゆえ、人間・社会科学の営みは観察・記述ではなく対象者との「対話」である、といった考えが一部の研究者に浸透したのである。

これまで人間・社会科学は自然科学をモデルとして自身を理解してきた。しかし「解釈学的転回」をふまえるなら、「物理的操作の図式よりは、文化的パフォーマンス――演劇、絵画、文法、文学、法律、遊び――の図式からの類比がなされるようになってきている」(Geertz 1983 ＝ 1991: 37) のである。

「レトリック」への関心の高まりと関連するのは②の特徴である。80 年代以降、人間・社会科学における一部の学者達は、自分達の探究活動も研究対象と同じ水準に位置しており、その一部を構成していると考える。そして彼らは自らが研究対象に向けていた「まなざし」を自分自身へと向ける。その結果、学者の探求活動は学者同士の「議論」であり、その議論を考察する方法として「レトリック」が注目されるようになったのである。

この様な、学問分野のレトリックについての再考は「探究のレトリック Rhetoric of Inquiry」と呼ばれている。「探究のレトリック」は、学者達は対象を解釈し、発見を相手に説得するためにレトリックを用いていることを強調する。「学問は議論を用い、議論はレトリックを用いる。『レトリック』は単なる飾りや、ごまかし、

トリックなどではない。それは説得的言説という古代の意味でのレトリックなのである。数学的証明から文芸批評まで、学者はレトリック的に書く」(Nelson et al. eds. 1987: 3)。

古代ギリシャにおいて、アリストテレスはレトリックを「どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力」(『弁論術』1355b 25) と定義した。レトリックはキケロの時代までに (1) 発想、(2) 配置、(3) 修辞、(4) 記憶、(5) 発表、の五部門へと分類される。中世、近世へと時代を経るにつれレトリックの意味は「修辞」へと次第に縮小していった。そして近代に至り、科学との対比で、レトリックは「単なる装飾」、「内容を欠いた空疎な言葉」という意味に貶められ、文学・文芸批評などの一部を除けば学問分野において顧みられることはほとんどなくなった。

しかし 1960 年前後に「説得の技術」としてのレトリックが復権する。ペレルマン、トゥールミンが、形式合理性に還元されない日常的推論における合理性、理由付けを考察するため「レトリック」に注目したからである。この「説得の技術」という意味でのレトリックの復権は「新しいレトリック」と呼ばれ、学問分野においてレトリックを見直す契機となった。この「新しいレトリック」の影響を受けつつ、人間・社会科学におけるレトリックを考察しようとしたのが「探究のレトリック」である。

社会学においてレトリックを対象とした研究は 2 つに大別できる。一方は一般の人々のレトリックに注目するものである。例えば、社会問題の構築主義の一部の研究者 (ベスト、イバラ＝キツセ) は、人々がクレイム申し立て活動の中で用いている論法や文彩などのレトリック、すなわちクレイムの中に現れる言い回しや論証のパターンを明らかにしようとしている。他方は社会学者のレトリックに焦点をあてる。つまり著作の中で社会学者は読者を説得するために、いかなるレトリックを用いているのかを明らかにするものである。

１－２　本稿の対象と目的

今まで社会学のレトリックを扱った研究がなかったわけではない。例えば、R・ニスベット (Nisbet 1969) は、人々はメタファーを用いて現実を認識するという観点から、社会理論における有機体のメタファーを検討している。また A・ワイガート (Weigert 1970) は社会学における科学性のレトリックを考察した。そして彼らの仕事を引き継ぎ、積極的にレトリック論や文芸批評の概念を援用し、社会学の著作のレトリックを分析しているのが本稿で扱うブラウンである。

ブラウンはアメリカのメリーランド大学の社会学部教授である [2]。レトリックを扱った彼の著作には『社会学のための詩学 A Poetic for Sociology』(1977)、『テクストとしての社会 Society as Text』(1987)、『市民的言説としての社会科学 Social Science as Civic Discourse』(1989)、『社会的テクストを書く Writing the Social Text』(1992)、『ポストモダン的表象 Postmodern Representations』(1995)、『民主的な科学に向けて Toward a Democratic Science』(1998) などがある。

また彼は、「探究のレトリック」運動に社会学者として積極的に関わってきた人物でもある。例えば、1984 年にアイオワ大学において開催された「人間科学のレトリック」シンポジウム、1986 年のテンプル大学での「人間科学のレトリックの事例研究」シンポジウムなどに参加。さらに 1989 年にはブラウン自身が中心となり、メリーランド大学で「社会的テクストを書く」と題されるシンポジウムを開催している。

社会学のレトリック分析において、ブラウンの議論は常に参照されており (Edmondson 1984; Green 1988; Atkinson 1990; Hunter 1990)、ブラウンはこの分野の第一人者といえるだろう。にもかかわらず、日本の社会学においてレトリック分析が定着していないという事情もあり、一冊の邦訳があるだけで彼の議論は、ほとんど日本に紹介されていない。また邦訳に携わった訳者ら (安江、小林) が指摘しているように、ブラウンの議論には文学批評、科学論、解釈学、記号論、社会言語学など、極めて多岐にわたる知見が盛り込まれており、彼の議論を読者から遠ざける一因となっている。

以上のような理由から、なぜ、いかなる目的のために、ブラウンはレトリック分析をおこなうのか。さらに社会学のレトリック分析は、社会学にとって一体いかなる可能性を有しているのか、が問われるべき課題として残されている。

本稿の議論の流れを示そう。まずブラウンの問題関心を明らかにし、彼の議論の全体像を描き出す。次いで「認識としてのレトリック」という立場に基づく、彼の社会科学のレトリック分析について概観する。そしてブラウンの「問題化」概念に着目し、彼の社会科学のレトリック分析が単なる類型論に留まらない可能性を有していることを示す。すなわちブラウンの社会科学のレトリック分析は、議論を構成している著者、対象、聴衆などの各アクターの関係をレトリックを通じて描き出そうとしている点で、「議論の社会学」とでもいうべき研究領域へと展開しうるのである。

2　ブラウンの問題関心

2－1　公共空間における共同体の形成

日本においてブラウンの議論は「ポストモダン」論の一つとして紹介されている。それは『テクストとしての社会』の邦訳の副題が原著と異なり、「ポストモダンの社会像」になっていることからも明らかである。

ポストモダン論の特徴とは、言語が根本的なものであり、現実は論争的であるという考えである (Lemert 1992: 23-4)。ブラウンも「社会的現実は、象徴的とりわけ言語的な相互作用によって生み出される」(Brown 1987=1989: 120) というポストモダン論の前提を受け入れ、合理性や客観性は人々のレトリック的な相互行為により支えられていることを明らかにしようとする。

しかし問題は、ブラウンが一体いかなる問題関心から、ポストモダン的前提を採用しているのかである。ブラウンの問題関心を押さえることは、彼のレトリック論を検討する上で不可欠の作業である。なぜなら、この点が明らかにされなければ、ブラウンの主張を「合理性や客観性を否定するもの」と誤解する恐れがあり、またブラウンが社会科学のレトリック分析をおこなう理由も曖昧なままに留まるからである。

結論から先に言えば、ブラウンの目的は「公共空間 public space」において、人々が「理にかなった reasonable」判断を下すための「賢慮 prudence」の基盤となるような共同体を打ち立てることである。

ブラウンは現代社会を次のように捉える。科学が公共空間で支配的になった結果、道徳的、政治的価値を含む問題を市民が互いに論じることが難しくなってきている。彼は、このような科学の専制の原因を、人々が問題を議論するための前提を共有しなくなったことに求める。「今日の道徳的カテゴリーは、議論を通じて倫理的指針を模索することが無意味であるほどに混乱している。なぜなら競合する集団が『知的伝統』(マッキンタイアー) や『議論領域』(トゥー

ルミン) に相当するものを共有していないからである。そのような伝統や領域なしでは、説得的な道徳的言説は形作られない。なぜなら、そのような道徳的言説を有意味なものにする倫理的共通知識を欠いているからである」(Brown 1998: 218)。

賢慮とは、社会・政治領域のような不確実な状況下において最適な行為をするための伝統的な知恵とされる。多様な文化的状況下では、その賢慮の基盤となる知的伝統や議論領域が衰退し、代わりに科学のような倫理的に中立的な言語がコミュニケーションに採用される。その結果、社会や政治の問題について適切な判断を下すことが難しくなる。ブラウンは社会科学のレトリック分析を通じて、賢慮の基盤となる共同体の再生を目指す[3]。

以下、この骨子に適宜肉付けをおこないつつ、社会科学のレトリック分析が他者への寛容を促し、人々を議論へといざない、共同体を再生する道筋を描きだすことにしよう。

２－２　社会科学のレトリック

公共空間において、人々は科学と倫理の２つの枠組を用いて現実を理解する。「科学による認識は、我々の日常生活に枠組を提供する、共有された外的世界を生み出す。……語りを通じて我々はアイデンティティを形成し、生活に意味を与える」(Brown 1998: 20-1)。

人々がアイデンティティ、道徳、共同性、伝統などについて語るための語彙を提供する倫理の代表が、A・スミスやJ・S・ミル以来の人間・社会科学である。「社会科学は、我々の重大事を表現するための語彙や現代社会を判断するための基準を提供する……個人的なアイデンティティ同様、我々の集合的な自己定義は、社会学、人類学、経済学、心理学、歴史学などの語彙を通じて表明される」(Brown 1989: 4)。つまり人間・社会科学は、人々が生きる世界に形をあたえ、目的を実現する手段である。

社会的、政治的問題について語るための語彙を人々に提供する人間・社会科学は、現実の問題への応答であり、ゆえに社会的・政治的文脈から独立したものではありあえない[4]。しかし、自然科学を模範とする人間・社会科学における実証主義的傾向は、人間・社会科学の文脈依存性を隠蔽しようとする。その結果、公共空間において倫理的規範的問題を語るための語彙を提供する人間・社会科学は機能不全に陥っている。

そこでブラウンは人間・社会科学のレトリック分析を試みる。ブラウンにとってレトリックとは自己反省のための方法である。「レトリックが、不確実な領域における市民の理にかなった判断を助けるものとされた時代と異なり、今日レトリックは新たな機能をもっている。すなわち、批判すること、不透明なものを明確にすること、神話化された関係を脱神話化することである」(Brown 1998: 6)。

社会科学のレトリックを明らかにすることで、実証主義的傾向が隠蔽してきた人間・社会科学の社会的・政治的文脈依存性が明らかにされる。つまり聴衆を前にした、ある問題に関する語りであることに反省が促される。そして人間・社会科学が、聴衆に向けられた語りの一種であるということに自覚的であること、つまり自身の語り方を対象化するということは、今現在採用しているものとは異なる語り方がありえたのではないか、といった人間・社会科学の語り方の偶然性、可謬性について再考をうながす。

２－３　賢慮の復権

この語り方の偶然性、可謬性の自覚は、世界や経験は語り方に応じて異なって現れると考え

る相対主義的な態度をとることでもある。しかし、この相対主義は、個々人が構成する現実は全て正しく、ゆえに真実などないと考える極端な相対主義ではない。むしろ自身の立場を絶対視せず、異なる語り方を採用している他者達を考慮するための、他者と共存するための態度・作法としての相対主義である。

自身のレトリックを反省し、ある議論領域において採用されているレトリックに現実は相対的であると自覚することは、別バージョンの現実への配慮を促す。そして時には自身の主張にも疑問をなげかけ、自らとは全く異なる見方を知ることにより、他の語り方を受け入れて自身の語り方を修正する契機が生まれる[5]。

他者と共存するための態度・作法としての相対主義は、自身のレトリックを採用しつつも、それを妄信せずに、常に別のレトリックを捜し求めている点においてアイロニー的である[6]。そしてこのアイロニー的態度は、聴衆の主体的な対話への参加を促し、議論に参加している人々の間に連帯を打ち立てる (Brown 1995: 13)。

すなわち、レトリック分析によりもたらされるアイロニー的態度により、人々はある問題を議論するという点において結び付けられ「知的伝統」や「議論領域」を形成する。そこでの議論の蓄積が、理に適った判断の根拠、すなわち賢慮を生み出すのである。「我々が共有された関心事について互いに議論する時に、共同体は作られる。……理に適った道徳的政治的言説の要点は、市民の知 (civic intelligence) とでもいうようなものを育むことである」(Brown.1998: 223)。

理に適った判断をおこなうための市民の知、すなわち賢慮とは「倫理的な目的と帰結に関する知識を含んでいる。ある状況において人々、市民にとって善いことを捜し求める実質的なタイプの合理性」(Brown 1998: 220) であり、それは人々の対話の蓄積から生み出される。そして人々が対話をおこなう際に求められる他者への配慮を促すものが、ブラウンにおいては自己反省の方法としてのレトリック分析なのである。

1984 年のアイオワ大学における「人間科学のレトリック」シンポジウムでは、レトリックは、論証、社会化、構成、批判、エンパワーメント、のいずれかの意味において用いられていた (Lyne 1985: 65 - 73)。この分類に従えば、ブラウンのレトリック分析はエンパワーメントを目的としたものであり、それは次の主張からも明らかであろう。「いかにして学問分野内におけるテクスト的反省 (textual reflectiveness) が、今まで以上に市民をエンパワーメントするのだろうか。もしすべての真理が究極的には虚構や神話であるとするならば、どのような神話が我々の政策にとって適切であるのか、どのようにテクスト実践が政策形成に寄与するのか」(Brown 1995: 4)。

3　認識としてのレトリック

以上がブラウンの目的と彼がレトリックに注目する理由である。ブラウンは公共空間における倫理的知の代表である人間・社会科学が機能不全に陥っていると考える。その解決策として、ブラウンが採用した戦略は人間・社会科学のレトリックを明らかにすること、言い換えれば、社会科学を聴衆を前にした語りとして捉えることである。レトリックに自覚的になることで他者への配慮が促進され、議論を通じて共同体が再生される。

社会科学のレトリック分析が市民をエンパワーメントしているか否か、その手段としてレトリック分析が適切かどうかという点に関して、これ以上は立ち入らない。むしろ、ここで

注目したいのは、社会科学を、ある問題をめぐる聴衆との議論と見なし、そのレトリックを分析するということの含意である。

本稿では、社会科学のレトリック分析は「議論の社会学」とでもいうべき研究領域の可能性を示唆していると考える。その理由について以下で説明していこう。まず、ブラウンのレトリックに対する立場を確認し、レトリック分析の事例を概観する。その上で、ブラウンのレトリック分析は、従来のレトリック分析のような類型論に留まらず、議論の社会学としての可能性を有していることを論じる。

３－１　認識としてのレトリック

ブラウンは「認識としてのレトリック Rhetoric as Epistemic」という立場を採用している。先に述べたように、ブラウンにとって人間・社会科学とは、聴衆を前にした語りであり、そのレトリックに自覚的になることは、他者への配慮をもたらすとされた。以上の主張の前提となっているのが「認識としてのレトリック」という考えなのである。

「認識としてのレトリック」によれば、レトリックとは説得的に論じるための技術であるだけではなく、議論において問題となる対象を構成するという意味で現実を認識する方法でもある。すなわち「言語は世界や心の反映ではない。むしろ人間の世界や心は言語という社会・歴史的実践から生じるものである。シンボルは事物や意図からではなく、社会的な協同行為からその意味を引き出すものとして理解される」(Brown 1989: 51)。要するに、反映説ではなく、現実は言語を媒介として社会的に構成されると考える立場のことである。

人間・社会科学の対象である世界や経験は、レトリックを通じて、はじめて議論の対象となる。このような立場に基づくからこそ、他のレトリックを採用し、自身のレトリックを修正することで現実をよりよく理解することができると考えることができるのである。

「認識としてのレトリック」の観点からは、「日常の経験を社会科学の報告へと翻訳することは、ジャンルやアイロニーなどの詩的概念を通じて理解される『テクストワーク』を含んでいる」(Brown 1998: 41) ものと見なされる。よってブラウンの人間・社会科学のレトリック分析とは、人間・社会科学において、どのようなレトリックによって議論が構成されるのかを明らかにすることである。それは言い換えれば、人間・社会科学のトポスを明らかにすることに他ならない。

３－２　トポス

レトリック論においては、人々が議論を構成する際に依拠するものを「トポス Topos」と呼んでいる。トポスとは本来「場所」を意味するギリシャ語であるが、レトリック論の文脈においては、議論において繰り返し現われる論法や論拠が類型化したものを指す[7]。

Ｐ・バーガーらは、日常生活において、人々は他者や世界を類型化して理解していることを指摘している。「日常生活における私の他者との出会いは、二重の意味において類型的なものとなる――つまり私は他者を一つの類型として理解すると同時に、それ自体が類型的である状況のなかで他者と相互作用し合うのである」(Berger and Luckman 1967=1977: 53)。他者や状況と同様、相互作用のなかで用いられる論法や論拠も類型化される[8]。

バーガーらによれば、類型化は匿名化でもある (Berger and Luckman 1967=1977: 67)。例えば、議論の場合、ひとたび論法や論拠が類型化され

たなら、それは当該議論の参加者の誰もが利用できるものとなる。聴衆を説得するのに有効な論法や論拠の類型を用いることにより、人々は効率的に議論を組み立てることが可能になる。

類型化された論法や論拠としてのトポスは、「共通トポス」と「固有トポス」とに区別される。前者は、あらゆる議論に適用できるものであり、後者は政治、法律、経済、科学などの特定の議論に特有のものである。

例えば、T・クーンのパラダイム論は、科学者集団における「固有トポス」を考察したものとして見なすことができる。『科学革命の構造』(1970=1971) においてクーンは、科学的共同体における知識の生成と変化を、パラダイムという概念を用いて説明しようとする。パラダイムとは、科学者たちが研究をおこなう際に参照する、共有された例題としての「見本例 (exemplars)」(Kuhn 1970 = 1971: 213) である。見本例というある種の類型を用いて、科学者たちは対象を構成し、その適否に関して評価を下している。すなわち、パラダイムは、対象を構成する際の枠組として、またその構成された対象を評価するための判断基準として機能する[9]。

このクーンの議論においても示されているように、トポスに関しては2つのアプローチが存在している。第一は、「説得」に焦点をあてるもの。つまり議論の際、主張の優劣を判定するための基準を明らかにしようとするものであり、第二は、「認識」に注目するもの、すなわち類型を用いて対象を構成するという側面を重視するものである[10]。

第一のアプローチの例として挙げられるのが、Ch・ペレルマンのトポス論である。ペレルマンは、議論において人々が価値判断をおこなうために依拠する6つの「共通トポス」――量、質、順序、存在、本質、人格――を論じている。量のトポスは「多いものは少ないものよりもよい」と表現できる。以下同様に、質のトポスは「希少なものはありふれたものよりもよい」、順序のトポスは「先のものは後のものより、原因は結果より優っている」、存在のトポスは「現に存在するものは、単に可能なものよりも優っている」、本質のトポスは「類の本質をよりよく表す個体がよい」、人格のトポスは「人格の尊厳や自律に関することが優先である」などと表現できよう (Perelman 1977=1980: 58‐9)。

第二のアプローチの事例が、ブラウンの「認識としてのレトリック」である。ブラウンは人間・社会科学の「固有トポス」を問題にしている。つまり、人間・社会科学において、人々は、どのような類型化された論法を用いて対象を構成しているのかを明らかにしようとするのである。その一例が「根本的メタファー foundation metaphor」である。

「ほとんどの学問分野における大抵の調査者達は、根本的なメタファーを広く受け入れられているものとして見なしている」(Brown 1989: 30)。例えば、社会学の場合、社会を機械、有機体、演劇、ゲーム、テクストからのメタファーにより理解しようとする各種のアプローチが存在する。これらのアプローチは異なる「根本的なメタファー」を前提としている点において異なっているのである (Brown 1977: ch4)。

このように現実は、人々が議論の際に依拠する「類型化された論法、論拠」(トポス) を用いて構成される。そして、この「構成する力は、言語自体がもつ抽象的な性質であるだけでなく、言語を権威付け、権威を持った話者と話法を生み出す言論共同体に依存している」(Brown 1989: 47)。すなわち「類型化された論法、論拠」は、当該集団の成員たちによって、「類型」として社会的承認を得なければ、効力が弱まる

のである。ゆえに、社会的に承認された類型を用いない場合、つまり「一般に受け入れられている規定的原理に従わない場合は、信用を得ることや、聴衆を説得することさえ難しくなる」(Brown 1989: 50) のである。

つまり、聴衆が受け入れているトポスを踏まえ、議論の対象を構成するからこそ、語り手の主張の確からしさや妥当性が、聴衆による評価の対象となるのであって、トポスを無視した構成は聴衆の同意を得られないばかりか、無視される可能性もあるのである。

３－３　ジャンル分析

では、人間・社会科学においては、一体どのような類型化された論法を用いて対象を構成しているのか。また一体どのように新たな類型を生み出しているのか。ブラウンの具体的な分析の一部を紹介しよう。

ここで取り上げるのは、ブラウンの人間・社会科学における「ジャンル」の分析である。ブラウンによれば「テクストや言説をジャンルとして分類することは、分類されたものが重要な特徴を共有しており、それゆえ他から区別されると想定している」(Brown 1998: 228 - 9)。すなわちジャンルとは、ある共通した特徴を有するテクストや言説を一つにまとめたカテゴリーである。

我々は議論において、「転義 trope」やトポスといった類型化された語り方を用いている[11]。そして、繰り返し用いられる幾つかのレトリックが一つのカテゴリーへとまとめられ、議論における典型的な論じ方として類型化されるに到る。これがジャンルである[12]。

ブラウンは、人間・社会科学の各ジャンルを特徴づける類型化された論法 (トポス) を明らかにしようとするのである。そしてジャンルに関して以下のように説明する。

我々は「書く」際、類型化された語り方を用いる。しかし、恣意的に語り方を選択しているわけではない。書き手が説得しようと試みる聴衆が共有しているジャンルに従って書くのである。つまり、ジャンルに適した記述スタイルを採用するのである。しかし、新たな対象や発見などの、既存のジャンルの様式では適切に表現できないものの場合、既存のジャンルから逸脱した記述スタイルを採用することになる[13]。

ブラウンによれば、このようなジャンルに対する「忠実」と「逸脱」という２つの態度の関係は弁証法的であり一時的なものである。すなわち、既存ジャンルＡは、それ以前のジャンルＢからの逸脱が、人々に受け入れられた結果なのである。

ジャンルに忠実な記述は、読者が既に有している想定を強化する。なぜなら、ジャンルに従って書く、すなわちジャンルが有する特徴を満たすことにより、客観性や信用性がもたらされるからである。「ある集団は一つの正しい方法があると決定した時にのみ、［表現のための］詳細な規程に対する信頼を獲得することができる。レトリックにおいては、『一つの正しい方法』とは、テクストの安定だけでなく、レトリック的状況、行為者の安定を暗示する。ゆえに更なる議論を必要としない安定したレトリック的世界においては、物事は皆同じ条件下にあると人々は考えるようになる。この文脈において、所定の形式は、必要な柔軟性を過度に制限することなく、容易で効率のよいコミュニケーションを可能にするのである」(Bazerman 1988: 271［ ］内は氏川)。

ジャンルは、所定の形式を設けることで客観性を保証し、コミュニケーションを容易にするが、当然そのジャンルの所定の形式で表現でき

ないものは無視される。あるジャンルにおいて所定の形式では対処できない問題が発生した場合には、メタファー、アイロニーなどの転義をもちいてジャンルを拡張することがおこなわれる。これにより既存の形式においては無視されてきた現実の側面に光が当てられる。「生きたメタファーや拡張されたジャンルは、未だ説明されていない次元、まだ知られていない領域を強く暗示する」(Brown 1998: 48) のである[14]。

3－4　古典的民族誌とエスノメソドロジー

ブラウンはジャンルに忠実であることの例として古典的民族誌を、ジャンルからの逸脱の例としてエスノメソドロジーを挙げる。

民族誌の目的は、ある文化の主要な特徴を、別の文化の人々にとって理解可能な形で表現することである。よって民族誌というジャンルは幾つかの特徴を持つことになる (Brown 1998: 48 - 52)。①民族誌は自国の文化と調査地域の文化との間に「距離」や「他者性」を設定する。②著者は２つの文化を媒介する信頼しうる人物として描かれ、③ある実践は、一般的文化規範の表象として記述される。④そして以上の記述は物語の構造の中に順序づけられる。

例えば、ある学者が遠い異国へと調査に赴く。初めは部外者であったが、ある事件を契機に当該文化の成員の視点を獲得し、当該文化の一員として本国の読者に語るという形式が採用されるのが古典的民族誌記述の――幾分戯画化された形ではあるけれども――特徴である。「民族誌は、それ自体を文学的ジャンルの一種として定義するパラダイム的な表現の規則を持っている。民族誌の実在論 (realism)、信頼性、適切性は民族誌的表現の規則の遵守に依存している。民族誌における実在論は、ジャンルの規則に従った表現を通じて生み出される」(Brown 1998: 53)。

エスノメソドロジーは、アイロニーを用いて、既存の経験主義的な社会科学からの逸脱を試みる。アイロニーはジャンルの拡張に適した転義である。「知る方法としてのアイロニーは、物事を異なる視点から理解するのに役立つ。何かをアイロニー化することは、慣習的文脈から異なる文脈へと物事を位置づけることであり、そのような否定を通じて、我々は物事が何であるかをより理解できるのである」(Brown 1998: 56)。アイロニーにより既存の文脈 (ジャンル) は拡張され、新たなものの見方が可能になるのである。

ガーフィンケルがアイロニー化するのは経験主義的な社会科学である。すなわち「所与の日常の現実を社会的に構成されたものとして暴露するだけでなく、科学的合理性も常識と何ら変わりないことを明らかにしようとする」(Brown 1998: 57)。経験主義的な社会科学において合理性は説明のための資源であった。ガーフィンケルはこの想定を反転させ、合理性を、あらゆるミクロな相互作用において生み出される人工物とし、それ以外には何の存在論的基礎付けを有さない相互実践を通じて社会的現実が構成されることを明らかにしようとする。

この時ガーフィンケルが用いる文体上の工夫がアイロニーである。「社会の成員は解釈枠組として背後仮説を用いている。……これらの背後仮説を見えるようにするためには、普段の日常生活にとって部外者 (stranger) になること、そこから距離をとること (estranged) が必要である」(Brown 1998: 58)。ガーフィンケルの違背実験とは、ある集団の成員の中にいながらにして背後仮説から距離をとるためのものに他ならない。慣習的文脈から異なる文脈へと物事を位置づけるために用いられるのがアイロニーなのである。

4　社会学のレトリックから議論の社会学へ

では「認識としてのレトリック」の立場に基づく、ブラウンの社会科学のレトリック分析は社会学にとっていかなる可能性を有しているのか。

本稿では、ブラウンの社会科学のレトリック分析は、既存のレトリック分析が類型論に留まっていたのと異なり、議論の社会学という研究領域へと発展しうる可能性を持つと考える。議論の社会学は、議論の場を構成するアクター間の関係性を、レトリックに注目することで明らかにしようとする。それは著者、対象、聴衆の関係を、各アクターを媒介するレトリックを通じて解明しようとする試みである。

しかし、現在のブラウンの社会科学のレトリック分析が、そのまま議論の社会学を意味するのではない。本稿ではブラウンのレトリック分析が、レトリックの類型論に留まらない可能性をもつ理由を、彼の「問題化」の主張に求める。この点に関して敷衍しよう。

4－1　問題化

現実はレトリックにより構成されるという「認識としてのレトリック」の立場から、厚東は社会学の学説を「物語」と見なし、その語り方を３つに類型化している。第一は、認識する者が出来事に遭遇する順序が優先される〈旅の物語〉、第二は、歴史的な成立過程と概念の論理的関連とを意識的に混合させる〈起源の再構成〉ディスクール、第三は、主要概念が最初に設定され、その概念が自己展開していく中で論理体系が再生産されるような〈概念の弁証法〉的語りである (厚東 1991: 296‐7)。

このような語り方の類型を描き出すことは、現在採用している語り方に自覚的になることをもたらし、別の語り方の可能性を意識させるという効果があるだろう。しかし、その反面「それは単にレトリックの類型を描き出しただけ」という批判を招く可能性がある。

このような批判を招く一番の理由は、社会学のテクストの中の著者のレトリックの類型化に焦点を当てるあまり、レトリックは聴衆を説得するために用いられることを軽視してしまっている点にある。そもそもレトリックに注目することは、著者の語りを単なるモノローグとしてではなく、聴衆との議論の中へと位置づけ直すことを意味する。よってレトリック分析とは、著者のレトリックを類型化するだけではなく、そのレトリックを用いて、どのように聴衆に働きかけているのかを明らかにすることでもある。

ブラウンのレトリック分析も、社会科学における、あるジャンルのレトリックを類型化しただけと見なされるかもしれない。しかし、そのレトリック分析を、著者のレトリックの類型論から、議論領域を構成する著者、対象、聴衆の関係性の分析へと転換させる契機がブラウンの主張の中に存在する。それが「問題化」である。

ブラウンは「ジャンル」という概念を用いることにより、社会科学という一種の議論を「問題化 Problematization」の過程として描き出している。

人々は、ジャンルに基づいて、状況を定義し、対象を構成する。ブラウンによれば、このようなジャンルに基づく定義や構成は、世界や経験を、問題となるもの、自明なもの、無視するものに区別する作業に他ならない[15]。「有意味な現実の創造とは、現象を出来事や経験へと組織するシンボルの間主観的使用を含んでいる。つまり、説得的コミュニケーション、すなわちレトリックを通じて経験は表現され達成されるの

である。人々は、事例の諸側面を固定化し、焦点化し、禁止するカテゴリーのレパートリーを作り上げる。これらの諸側面は、語られない、沈黙したものを背景にして前景化され、明確な、意識された経験となる。それゆえ出来事や事物は客観的なものとなり、時系列の中に順序づけられる。この過程から生じる知識は語りの形式を取るのである」(Brown 1998: 22)[16]。

ジャンルに従い、問題となる領域とそうでない領域とが区別されることになる。しかし、これは議論が終了した時点から見たものであって、議論の最中、参加者たちは「味方を取り込み、ネットワークを生み出し、支持者を形成」(Brown 1998: 42) しているのである。すなわち議論の過程で、各論者は、自身の主張を聴衆に受け入れさせるために、自分の主張に有利な証言や事実を取り込み、自分に不利なものについては、これを遠ざけているのである。

要するに、ブラウンにとって議論――２人以上の人物が、語り手と聴き手の役割を交換しつつ、主張、反論、再反論をおこなう対面的相互行為ではなく、ここでは著者が読者を説得するためにテクストの中で行なう論述を指す――は、ジャンルに従った問題化であり、言い換えれば、テクストにおける著者自身、対象、聴衆の関係性をレトリックによって操作することに他ならない[17]。

４－２　社会学のレトリックから議論の社会学へ

既存の社会学のレトリック分析は、社会学者の語り方の類型化が焦点となる傾向があった。これに対し本稿では、ブラウンの「問題化」という主張に注目することで、彼のレトリック分析が、議論領域を構成する社会的関係を明らかにする「議論の社会学」とでも呼べるような研究領域へとつながる可能性を持つと考える。

議論において人々は、レトリックを用いて問題化をおこなうわけであるが、それは同時にレトリックによって当該議論領域を構成する各アクターの関係を操作することでもある。なぜなら、レトリックは働きかける相手を必要とするという大前提を踏まえれば[18]、レトリックの変容は、著者、対象、聴衆の関係性の変容を意味するからである。

あるテクストにおいて展開される議論のレトリックを類型化し、その変容を明らかにすることで、レトリックにより媒介される著者、対象、聴衆 (敵対者、賛成者、傍観者など) 間の関係とその変容を描き出すことが可能になる。

ここで上述した古典的民族誌、エスノメソドロジーを例に、テクスト内において、どのように議論を構成する各アクター間の関係性が操作されるのか簡単に説明しよう。

ブラウンが描き出した古典的民族誌の特徴は、「ある学者が異国へと調査に向かう。初めは部外者であったが、ある事件をきっかけに現地人の視点を獲得し、本国の同僚に向けて当該文化について説明する」というものである。ここには少なくとも学者、現地人、同僚というアクターが存在している。そして古典的民族誌というテクストの中でのアクター間の関係性の変容を示せば次のようなものになるだろう。

①本国の学会から学者が現地へと向かう。この段階では学者は同僚たちの中にあり、現地人とは区別されている。この区別は空間的移動によって表現される。②現地で当該文化の成員の視点を獲得する。学者は本国の同僚たちとは切り離され、現地人と結びつく。③帰国後、本国の同僚たちに現地文化について報告する。最後の段階では学者は現地文化の専門家として本国の同僚から区別される[19]。

エスノメソドロジーの場合も同様の操作をお

こなっている。違いは民族誌が所与の異国へと調査に向かうものであるのに対し、エスノメソドロジーは日常生活の内部に異国を作り出す作業に他ならない点である。すなわち、①研究対象者と自らを区別する社会科学者に対して、エスノメソドロジストは理論家を研究対象者と同じ水準に位置づける。ここではこれまで分離していた理論家と研究対象者を結びつけることが行なわれる。②次いでエスノメソドロジストはアイロニーを用いて研究対象者から距離を置く。距離をとることで対象者の背後仮説を知ることができる。③研究対象者の背後仮説を明らかにしたものとしてエスノメソドロジストは他の社会学者に対しても距離を設ける。

このようにテクスト内において著者は、著者自身、対象者、同僚達との関係性をレトリックを用い、各段階ごとに操作しているのである。

4－3　まとめ

これまでの議論をまとめよう。本稿の目的はブラウンの社会科学のレトリック論の可能性を明らかにすることであった。まず公共空間における共同体の形成というブラウンの問題意識を押さえ、それに対処するために彼が採用している「認識としてのレトリック」という立場を確認した。

本稿では、そこからさらにブラウンの「問題化」という考えに注目して、彼のレトリック分析が単なる類型論に留まらず、「議論の社会学」として展開しうる可能性を持つということを論じてきた。

議論――著者が読者を説得するためにテクストの中で行なう論述――において人々は、レトリックを用いて対象を構成している。ブラウンは、そのようなレトリックを用いた状況の定義づけを問題化として捉える。問題化において、著者は自他の関係をレトリックを用いて操作しているのである。

ゆえにブラウンの社会科学のレトリック分析は、単なる社会科学のレトリックの類型論ではなく、社会科学の議論を、各アクターの関係の変容から考察する視点を提供する可能性を有している。

最後に本稿の限界と課題を示しておこう。

本稿ではブラウンの社会科学のレトリック分析が、議論領域を構成する各アクターの関係性とその変容をレトリックに着目して描き出す「議論の社会学」へと展開する可能性を述べてきた。しかし「議論の社会学」が十分に提示されているとはいえない。

本稿で取り上げてきたのは人間・社会科学のテクストであり、議論といっても、実際に人々が行う対面的、相互的なものではない。ここでの議論とは、著者がテクストで展開する議論である。ゆえに本稿４－２において示した著者、対象、聴衆の関係の変容も、あるテクストにおいて著者によって呈示されたものに留まる。

よって現時点では、本稿で示した関係性の変容も「著者の語り方の類型論の域を出ていないではないか」といった批判を免れない。つまり、あるテクストの中において著者はいかにして著者自身、対象、聴衆を関係付けているのかを明らかにしてはいるが、それが別の著者との対話を通じて変容してゆくというダイナミックな過程を描き出していない。

今後の課題としては、一つの著作の中のレトリックを分析するだけでなく、あるジャンルの複数のテクストを素材に、著者たちはテクストにおいて著者、対象、聴衆をどのように関係付けているのか、それら競合する関係性の呈示の中で、なぜあるものは受け入れられ、他のものは衰退するのか、といったあるジャンル内で行

なわれる動的な過程を描き出すことである[20]。

もう一つの課題は、実際の議論において語り手は、どのようなレトリックを用いて、自他の関係を操作しているのかを明らかにすることである。すなわち具体的な論争を事例に、議論の参加者たちは、どのように語り手自身、対象、聴衆との関係をレトリックにより操作しているかについての考察である。その際、クレイム申し立てを議論とみなし、そのレトリックに注目しているベスト、イバラ＝キツセらの構築主義のレトリック分析とブラウンのレトリック分析の相違点を明らかにすることが必要な作業となるだろう。

注

[1] この意味でのレトリックにはメタファーやアイロニーなどの文彩と、両刀論法 (2 つの選択肢のうちどちらを選択しても結果は変わらないことを示す論法)、逆ねじ法 (相手の主張を相手に突き返して自滅を誘う論法) などの論法がある。文彩と論法については野内 (2002) を参照のこと。

[2] その他に同大学において比較文学の客員教授も務めている。

[3] ブラウンはレトリックという学問が、多様な言説、単一の倫理的共同体の分裂といった事態に対応するために、古代ギリシャのポリスにおいて発明されたことを指摘している (Brown 1998: 218, 224)。

[4]「社会研究がレトリックによって構築されるものであるということ、すなわち、それは特殊な政治的歴史的コンテクストのなかに生起した問題に答えるためにつくり出された一連の意味である……社会科学も日常会話と同じく、ある特殊な聴衆を相手にある効果をもたらし、それを相手に納得させるために考案されたたまたまの認識判断からなるものにすぎない」(Brown 1987=1989: 133)。

[5]「[現実の] 別バージョンを示し、シンボルの媒介なしに知りうる外的実在と絶対的普遍的に一致するものはないということを示すことによって、レトリック的批評は真理を相対化する。レトリックは、実在主義者が認知的、道徳的効果を生み出す際に用いる技術であるだけではなく、相対主義者によって、そのような効果の産物をわかりやすいものにし、修正へと開かれたものにする方法として用いられるのである」(Brown 1995: 9 [ ] は氏川)。

[6] ここでいう「アイロニー的」とは、ローティのいうアイロニストと同じである。ローティによれば、人は誰でも「終極の語彙」という、行為や信念を正当化するための一連の言葉を有している。アイロニストとは、「終極の語彙」に懐疑的な人、すなわち自身が用いている正当化の言語はたまたま採用されたものにすぎず、他によりよいものがあるかもしれないと常に問い続ける人物のことである (Rorty 1989=2000: 153 - 4)。

[7] トポスに関する詳しい説明は Reboul(1993=2000) を参照されたい。

[8] A・シュッツによれば、「われわれ人間は、社会的世界における自己の状況や、われわれが他者や文化的対象に対してもつ様々な関係をある程度まで類型化して考えている。……日常言語の語彙や文法は、言語集団によって社会的に認められた類型化の縮図だといえる」(Schutz 1970=1980: 88 - 9)。

このシュッツの類型論を踏まえ、C・ミラーは類型化された状況がレトリックの類型の基礎になっていると考える。「類型化をつうじて、我々は類似を生み出す。繰り返しているものは、物的状況ではなく、類型である。類型化された状況が、レトリックの類型の基礎となっている。成功するコミュニケーションは、参加者が共通の類型を共有することを求める。類型が社会的に構成されるかぎり、これは可能である」(Miller 1984: 157)。

[9] 知識が創造され、解釈される方法を研究するクー

ンの議論はレトリック論者達に少なからぬ影響を与えた。例えば、ある共同体の中で知識が生み出され、正当化される方法に関するクーンの記述は多くの学問分野に適用されることとなった。認識としてのレトリックに関心のある学者にとって、科学的知識は「客観的現実」ではなく、ある共同体の偶然的な正当化に基づいていると論じるクーンの主張は、認識としてのレトリックを裏付ける根拠を提供している (Enos ed. 1996: 378 - 9)。

[10] 誤解を招かないように説明を補足すれば、以下に挙げる「説得」と「共通トポス」、「認識」と「固有トポス」は、常に結びつくものではない。トポスには「共通」と「固有」の 2 種類があり、そのトポスに対するアプローチにも「説得」と「認識」の 2 つがあるということである。

[11]「転義」とは、「自然で基本的な意味作用の表現を別の表現に移動すること」である (野内 2002: 44)。転義の代表例としては、メタファー、アイロニーなどが挙げられよう。

[12] ジャンルとは、T・Farrell の「社会的知識」の一種であるといえる。ノースウェスタン大学のコミュニケーション学部教授のファレルは、人々がレトリックを用いて理に適った判断を下す際に必要とされる「ある特定の聴衆に共有されている知識」を「社会的知識 Social Knowledge」とよぶ。社会的知識とは、問題、人物、関心、行為の間の象徴的関係を構成しており、それは――もし受け入れられたなら――ある種の望ましい公的な振る舞いを含意しているものである。つまり、ある議論領域を構成している論点、人物、行為などの関係についての知識である。

社会的知識とは、実際に集団の成員に共有されているものではなく、共有されていると仮想されているものであり、議論においてパラダイム――それに倣って議論が展開されるような模範例――として機能する。従って、それは当該議論領域においてどのように振舞うべきかの指針となるような規範的機能を有している (Farrell 1976: 1 - 11)。

[13] グリーンによればスタイルとは、著者が採用している「導入、推敲、変換、削除、連結、分離などの規則」(Green 1988: 27) のことを指す。

スタイルとジャンルの違いは分析レベルの違いに過ぎない。すなわち個人に注目するか、集団に焦点をあてるかの違いである。「スタイルは個人レベルでの言葉の配列法に関するものである。しかし、著者は孤立していないので、テクスト空間は、ジャンルという共有された文学的方法を示す」(Green 1988: 27)。彼は、ジャンルは一般的な枠組として機能し、スタイルを制限すると考える。

[14] ここで明示的に語られることは少ないが、レトリックに注目する論者たちの暗黙の前提に注意を促しておきたい。それはレトリックをある目的を達成するための手段、道具としてみなすプラグマティックな立場である。例えば、ジャンルに従って書くということは、当該集団内における問題に対し、効率よく対処するための手段として選択されたものであり、既存の手段よりも効率の良いものが現われればそれが選択されるのである。

問題を説得的に論じるための方法を研究する「発想」部門がレトリックの中に含まれることを踏まえれば、レトリックに注目することは、問題を説得的に論ずる手段としてのレトリック、というプラグマティズムを意識的にせよ無意識的にせよ採用することになる。

レトリックのプラグマティックな性質を明確に把握していたのは古代のソフィスト達である (Reboul 1990 = 2000: 17)。また塩野谷によれば、ローティに代表される現在のネオ・プラグマティズムは、人々の間の合意を持って真理と見なしている。合意を達成するには、レトリックを用いざるを得ず、そのレトリックは行動上の指針、ルールとして有用であるのかという実践的基準によって適否が判断されるこ

とになる。それゆえ、ネオ・プラグマティズムはレトリカルなプラグマティズムとも呼ばれる (塩野谷 1998: 53)。

[15] ある集団において、どのようなレトリックを用いて世界や経験を問題化し、問題領域内の諸要素を結び付けているのかということの解明は、人々の「経験の組織化」というゴフマンが探究したテーマと重なる。レトリック分析とゴフマンの方法論——特に『枠組分析』における——との関係を明らかにすることは、レトリック分析を豊かなものにする上で必須の作業となるだろう。

[16] 問題化は、科学社会学者M・カロンが提唱する「翻訳の社会学」の鍵概念である。「はじめに、分析されるもの／されないもの、関連あるもの／ないものとの間に第一の境界が引かれる。問題化は領域を開拓する。それは外部を切り離し、独自の一貫性と論理によって閉じた領域を作り出す。……次いで問われないもの、自明なものと、問題化されるもの、まだ知られていないものとの間に第二の境界線が引かれる。言い換えれば、問題を構成し、無視してよい領域を作り出すために、主張者たちは、確からしさを有し、懐疑を免れている解釈と理由付けのシステムを基礎概念として必ず用いる」(Callon 1980: 206)。

[17] ジャンルに従って世界や経験を記述することで、客観性や確信性が得られるが、この客観化は、レトリックを用いて関係性を操作する——同盟を結び、敵を攻撃する——という点で、「力の形式 a form of power」でもあるとブラウンは考える。

[18]「言論を効果あるものにしようと思えば、話し手は聞き手に順応しなければならぬ。……話し手は話しかけようとする相手が現に抱いている考え方しか議論展開の出発点に選ぶことができない」(Perelman 1977=1980: 46)。

[19] ブラウンは民族誌、コペルニクスの直弟子レティクスの『第一解説』、デカルトの『方法序説』のレトリック構造を比較して「発見」の物語の構造を描き出そうとしている (Brown 1998:64‐92)。以下で引用する本間の紹介に基づけば、このブラウンの分析は、著者と聴衆との関係の変容を、レトリックを通じて描き出す「議論の社会学」に近いといえる。

「どの文献も、著者が異文化や新しい考えに接して、それに同化し、さらに読者にその新しいものを受け入れるように誘うことを目的としている。……著者は自分がかつて新しいものに対して『素朴 naïve』であったことを示し、かつて素朴だったものとして素朴な読者を導くガイドの役割を演じるのである。それは著者自身のより権威有るものへの自己形成である。……著者は最初は読者と同じ立場にいて、中間の部分で新しい世界……について語り、最後には最初の立場から、そして、読者から離れた立場 (即ち、転向後の立場) に至っている」(本間 1998: 163‐4)。

[20] この立場に基づけば、あるジャンルに属する著者らがおこなう当該ジャンルの継承、拡大、変換の過程として、すなわち競合するレトリックの攻防として学説の展開を描き出すことができよう。よって当たり前のことではあるが、学説とは、決して一人の人物により担われるものではなく、議論という「知識を強化する社会的な比較過程」(Willard 1983: iv) を通じて形成されるものである。

文献

Aristotelçs, ca. 330 BC, [Arist. Rh.] *Technç rhçtorikç* (Rhetorica).(= 1992，戸塚七郎訳『弁論術』岩波書店．)

Atkinson, Paul, 1990, *The Ethnographic Imagination*, London: Routledge.

Bazerman, Charles, 1988, *Shaping Written Knowledge: The Genre and Activity of the Experimental Article in Science*., Madison: The university of Wisconsin Press.

Berger, Peter L., and Thomas Luckman, 1967, *The Social Construction of Reality*, New York: Doubleday.(= 1977, 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社．)

Brown, Richard H., 1977, *A Poetic for Sociology: Toward a Logic of Discovery for the Human Sciences* , Cambridge [Eng.]; New York: Cambridge University Press.

――――― ,1987, *Society as Text: Essays on Rhetoric, Reason, and Reality*, Chicago: University of Chicago Press.

――――, 1989, *Social Science as Civic Discourse: Essays on the Invention, Legitimation, and Uses of Social Theory*, Chicago: University of Chicago Press.

――――― , 1992, *Writing the Social Text: Poetics and Politics in Social Science Discourse,* New York: Aldine de Gruyter.

――――― , 1998, *Toward a Democratic Science: Scientific Narration and Civic Communication*, New Haven, Conn: Yale University Press.

――――― ed., 1995, *Postmodern Representations: Truth, Power, and Mimesis in the Human Sciences and Public Culture*, Urbana: University of Illinois Press.

Callon, Michel, 1980, "Struggles and negotiations to define what is problematic and what is not: The socio‐logic of translation," K.D.Knorr, R.Krohn and R.Whitely eds., *The Social Process of Scientific Investigation.* D.Reidel Publising Co, 197-219.

Edmondson, Ricca, 1984, *Rhetoric in Sociology*, London: Macmillan.

Enos, Theresa ed., 1996, *Encyclopedia of Rhetoric and Composition : Communication from Ancient Times to the Information Age*, New York: Garland.

Farrell, Thomas B., 1976, "Knowledge, Consensus, and Rhetorical Theory," *Quarterly Journal of Speech*, 62: 1-14.

Geertz, Clifford, 1983. "Blurred Genres: The Refiguration of Social Thought," *Local Knowledge: Further Essays on Interpretive Anthropology.* New York: Basic Books.(= 1991，梶原景昭他訳「薄れゆくジャンル－社会思想の再成形」『ローカル・ノレッジ』岩波書店．)

Green, Bryan S., 1988, *Literary Methods and Sociological Theory: Case Studies of Simmel and Weber*, Chicago: The University of Chicago Press.

本間栄男，1998，「科学史とレトリック」『化学史研究』25 (2): 160-70.

Hunter, Albert ed., 1990, *The Rhetoric of Social Research*, Rutgers University Press.

厚東洋輔，1991，『社会認識と想像力』ハーベスト社.

Kuhn, Thomas S., 1970, *The Structure of Scientific Revolutions,* 2nd ed., Chicago: Chicago University Press.(= 1971，中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房．)

Lemert, Charles, 1992, "General Social Theory, Irony, Postmodernism," Steven Seidman and D,G.Wanger eds., *Postmodernism and Social Theory: the Debate over General Theory*, Blackwell, 17-46.

Lyne, John, 1985, "Rhetorics of Inquiry," *Quarterly Journal of Speech*, 71: 65-73.

Miller, Carolyn R., 1984, "Genre as Social Action," *Quarterly Journal of Speech*, 70: 151-67.

Nelson, John S., Allen Megill, and Donald N. McCloskey eds., 1987, *The Rhetoric of the Human Science*, Madison:

University of Wisconsin Press.
Nisbet, Robert A., 1969, *Social change and History,* New York: Oxford University Press.(= 1987，堅田剛訳『歴史とメタファー：社会変化の諸相』紀伊国屋書店．)
野内良三，2002，『レトリック入門』世界思想社．
Perelman, Chaim, 1977, *L' empire Rhetorique*, Vrin.(= 1985，三輪正訳『説得の論理学』理想社．)
Reboul, Olivier, 1990, *La Rhetorique,* Paris: P.U.F.(= 2000，佐藤泰雄訳『レトリック』白水社．)
Rorty, Richard, 1989, *Contingency, Irony, Solidarity,* Cambridge: Cambridge University Press.(= 2000, 斉藤純一 , 山岡龍一 , 大川正彦訳『偶然性・アイロニー・連帯』岩波書店．)
Schutz, Alfred, 1970, *On Phenomenology and Social Relations*, Illinois: The University of Chicago Press.(= 1980, 森川眞規雄 , 浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店．)
塩野谷祐一，1998，『シュンペーターの経済観』岩波書店．
Weigert, Andrew, 1970, "The Immoral Rhetoric of Scientific Sociology," *American Sociologist*, 5: 111-19.
Willard, Charles Arthur, 1983, *Argumentation and the Social Grounds of Knowledge*, Alabama: The University of Alabama Press.

(うじかわ　まさのり、東京大学大学院、fwjg5317@mb.infoweb.ne.jp)
（査読者　瀬田宏治郎、林原玲洋）

Richard Harvey Brown's Theory of Rhetoric

—— Poetics and Politics ——

Ujikawa, Masanori

This paper argues what potentiality R. H. Brown' s theory of rhetoric has for sociology. His purpose is to rehabilitate a community in a public sphere. For achieving this purpose, he analyzes rhetoric of social sciences in terms of "Rhetoric as Epistemic."

Based on these respects, his rhetorical analysis of social sciences gets infused with "Sociology of Argument" which tries to clarify the relationships of actors that constitute an argument field.